

学生交流センターの竣工にあたって

語学センター長・国際センター長 明石 行生

学生会館の跡地に建った建物は何ですか？

新しい建物は、図1に示す学生交流センター (UF Student Central)です。学生会館に元からあったキャリア支援課と国際課に、新たに入試課が加わりました。学生交流センターは、学生さんにとって、入試・留学・就職といった人生の重大な局面に様々な選択肢を提供し、学生さんが夢を叶えるのを支援するワンストップサービスを提供します。また、後述するセーレングローバルハブに加えて、語学センターの英語教員と日本語教員がこの建物に集まり、さらに、国際センター教員と留学生の活動スペースもこの建物に移動しましたので、語学センターと国際センターの機能がこの建物に集約されました。このため、学生交流センターは、文字通り日本人学生と留学生が交流する場になりました。

なお、学生交流センターは、1階には、セーレングローバルハブ、プロジェクトラーニングスペース、留学サロン、国際課、講義室 (LC1) が位置し、2階には、キャリアセンター、講義室 (LC2 と LC3)、日本語の非常勤講師室、多目的室があり、3階には、入試課、アドミッションセンターの教員室、語学センターと国際センターの教員室、留学生相談室、コワーキングスペースを有する、建築面積 787 m²、延床面積: 1,975 m² の建築物です。今後、学生交流センターは、グローバル人材育成の教育の拠点になると期待しています。

エントランスにある「セーレン グローバルハブ」という表示はどういう意味ですか？

新しい建物 1 階のグローバルハブを対象施設としてネーミングライツを公募しました。選考の結果、福井県の代表的なグローバル企業のセーレン株式会社に命名権を付与することになり、命名権料をいただくことでグローバルハブの別称を付ける権利を得られ、図2に示すように、「セーレン グローバルハブ」と名付けていただきました。セーレン株式会社のご協賛に感謝します。この命名権料の一部は、日本人学生と外国人留学生の支援と教職員の国際活動に有効に活用させていただきます。

コロナ禍前のハブでは、スチューデントコーディネーター (SC) と呼ばれる日本人学生と留学生のリーダーがイースター祭やクリスマスパーティなどの季節の交流イベントを企画・運営していました。その一部では、地域の高校生を招待したり、地域に開放したりしていました。ハブは、常時開放されていたために、学生の交流の場であったとともに、日本人学生と留学生にとってそれぞれ英語と日本語の実践的な鍛錬の場でもありました。今後、COVID-19 がおさまれば、セーレングローバルハブにおいて、これまで以上に活発な学生交流が行われることを期待しています。



図1 学生交流センター



図2 セーレン グローバルハブの写真

学生交流センターの建物にはどのような特徴がありますか？

1階のセーレン グローバルハブとプロジェクトラーニングスペースは、普段は可動間仕切りで仕切られていますが、間仕切りを外すと50名程度を収容できます。セミナーやシンポジウムの会場として活用できます。また、1階の南側全面がガラス張りのカーテンウォール構造になっています。サッシを開放すると、室内空間を前庭に繋げてレセプションの会場などに活用できます。

3階には、語学センターの英語教員と日本語教員の居室、国際センターの副センター長室に加え、ワーキングスペースがあります。これは、語学センターの英語教員と日本語教員、語学センターと国際センターの教員（非常勤教員も含む）、教員と職員との間で協働作業を促進するスペースです。海外の大学との学術協定や共同研究などの国際交流についてディスカッションすることで、研究マインドの涵養とグローバル人材の育成に及ぼす相乗効果が得られることを期待しています。

語学センターはどのような教育を提供していますか？

福井大学は、「世界的水準での教育・研究を推進し、地域、国及び国際社会に貢献し得る人材の育成」を目的・使命としています。語学センターは、将来、グローバル社会で活躍する日本人学生と外国人留学生が、コミュニケーションツールである英語と日本語を身につけることを目標として、主に共通教育における英語教育と留学生に対する日本語教育を提供しています。上述の目標を達成するために、2018年度、語学センターに日本語教育部を加えて体制を強化しました。

英語教育部は何をしていますか？

英語教育部は、文部科学省のグローバル人材育成推進事業（GGJ）の支援を受けて、2013年4月に開設されました。現在、5名の常勤教員が所属し、英語の授業には約10名の非常勤講師に協力いただいています。1年生のコミュニケーション能力を上達させるため、「話す・聞く・読む・書く」の4技能を統合したコミュニケーションクラスを構築し、週2回の開講により、学生が英語によるコミュニケーション能力の基礎を身につけるよう教育してきました。今年度から、工学部

の協力により、工学部2年生の共通教育は、TOEIC対策強化のために、e-learningを導入しました。医学部の1年生には、医学部の教員と語学センターの教員が共同してエッセイのライティングの指導を行っています。特に優れたエッセイ10編を冊子にまとめた、Kuzuryu Memoirsを発行しています。高学年には、臨床の場で使える英語のコミュニケーション力を身につけることを目標とした専門教育が提供されています。また、2016年度に発足した国際地域学部では、国際的なビジネスの場で活用できる英語を身につけることを目的として、必須の海外留学に必要なコミュニケーション能力を養うために、国際地域学部の教員に語学センターの教員が協力する形で1年次に集中して英語教育を提供しています。

これまでコミュニケーション能力の習得を目的としてきた共通教育の英語教育を、今後は、専門分野で活用できる英語運用能力の習得を目的とした英語教育に少しずつ移行していきたいと考えています。そのため、語学センターでは、CLILなどの試行を行っています（詳しくは、渡邊綾先生の「福井大学における英語教育と語学センターの役割」をご覧ください）。ただし、1年生（工学部は2年生）で終わってしまう共通教育の英語教育だけでは継続性に欠けるので、例えば、国際企業で活躍できる人材に成長するまで十分な教育が施せないかもしれません。これを補うために、例えば、これまで外国人留学生だけに提供してきた工学部のProgram AやGEPISなどのプログラムの英語による専門科目を（留学生に開講するときだけでも）日本人学生にも開放していただけないかと考えています。現在、これらの英語による専門科目について、英語の教育コンテンツを整備することで内容を充実させていただいていますが、今後は科目数も増やしていきたいと思えます。

日本語教育部は何をしていますか？

福井大学では、2021年度は、コロナ禍のために交換留学を中止していますが、正規留学生を中心に約140名の外国人留学生が勉強しています。交換留学生も渡日可能であったコロナ禍前の2019年には、約230名の外国人留学生が勉強していました。政府の受入留学生30万人計画の推進に伴って、福井大学に受け入れる留学生の増加と、福井大学を卒業した後に日本の公的機関や企業に就職する留学生の増加が期待さ

れています。COVID-19がおさまれば、2019年度の実績を上回る数の留学生が福井大学に来てくれることを期待します。

上述のGEPISやGEP for R&Dといった英語で学位が修得できるプログラムもありますが、外国人留学生に地元企業への就職を勧める限り、日本語教育を充実することは不可欠です。何より、留学生には、日本の文化をよく理解していただき、卒業後に日本文化を世界に発信していただくために、留学生に対する日本語教育の重要度は益々高くなってきています。

このため、2017年度、日本語教育部では、これまで別々に提供していた交換留学生と正規留学生に対する日本語プログラムを統合し、そのレベルを初級から上級までの5段階に統一しました。また、書く、読む、話す、漢字といった技能別のクラスを充実することにより、学生の初級から上級までのステップアップを支援するカリキュラムを構築しました。これにより、レベル間の移動や複数のレベルにまたがる履修が可能になり、留学生のニーズにあわせてクラス選択ができるようになりました。

現在、日本語教育部には、3名の常勤教員が所属し、授業には約8名の非常勤講師にご協力いただいています。これらの改革に加え、日本語教育部の構成員は、日本語教育プログラムについて議論し、留学生の期待に応えられるように、継続して教材やカリキュラムに改善を加えています。最近、短期滞在の交換留学生が増えている傾向があるため、今後は、中級レベルの日本語教育を充実するなど、受入留学生の状況変化にも柔軟に対応していく計画です。日本語教員は、自らの専門分野において研究も盛んに行っており、その研究成果は日本語教育にも生かされています。また、これまで行ってきた国際共同研究が国際ネットワークの構築と学術協定の開拓にも繋がっています。

また、日本語教育部は、福井市や越前市など、地域に増える外国人のために、日本語教育のサポーターの養成にも協力しています。例えば、2019年には、越前市と福井銀行とともに越前市国際交流協会を支援して、日本語サポーター養成講座を実施しました。この取り組みは、文字通り、日本語サポーター養成を目的としていますが、将来、外国人に自信をもって日本語を教えられる方々が地域に増えることを期待したものであります。その結果、本学の留学生にとっても、地域において日本語を勉強する機会が増えることを期

待しています。

グローバル人材育成のために今後どのような教育を提供する計画ですか？

福大ビジョン2040に掲げる国際的に活躍できる卓越高度専門職業人を育成するためには、他文化を理解しながら福井大学で学んだことの誇りと自信を持って世界の大海に出ていけるように、グローバルリーダー育成のための教育が必要だと思えます。

日本人学生がグローバルリーダーとして活躍できるように成長するには、語学の修得に加えて、留学が有効な手段だと思えます。福井大学は、現在、世界中の160大学及び研究機関と学術交流協定を結んでいます。教職員のご尽力により、この協定校数は、最近の6年間で倍近くに増えました。学生さんには、是非、この交換留学制度を利用して、交換留学生として海外に飛び立ってください。工学部などカリキュラムの都合で交換留学ができない学生さんには、これも教職員の尽力により、毎年40件を超える短期派遣プログラムを用意しています。学生さんの留学を経済的に支援するために、教職員が協働して申請書を作成し、日本学生支援機構（JASSO）から奨学金をいただいています。

さらに、現在、学生が国際通用性を高めるのに必要な知識とスキルを向上する機会を与え、グローバルリーダーに成長する使命と責任を感じ、福大生としての誇りと自信を身につける動機付けをすることを目的として、「福井グローバルリーダー養成セミナー」を準備しています。これは、福井県から「F A A学ぶなら福井！応援事業」として大学等魅力アップ支援金を提供していただいたことで可能になりました。現在、日本人学生と留学生を対象として国際通用性を高めるセミナーのカリキュラムを構築し、動画などの教育コンテンツを準備しています。近い将来、授業として提供する予定ですのでご期待ください。

最後になりましたが、学生交流センターの建物の計画と建設にご尽力いただいた方々に感謝します。学生の皆さんは、是非、学生交流センターを積極的にご利用ください。

福井大学における英語教育と語学センターの役割

語学センター（英語教育部） 渡邊 綾

I. 福井大学における英語教育・語学センターの役割

語学センターは、2013年4月、福井大学の国際化を図り、グローバルに活躍する人材育成に取り組むために設立された。同センター設立以降、各学部との協力体制のもとで全学共通教育科目である英語カリキュラムの整備や統一的なシラバス作成、週二回制講義の導入、入学生の英語力を計測するプレイスメント・テストの開発と導入といった抜本的な英語教育改革を推進してきた。これらの改革と並行して、語学力（英語力）強化とグローバル人材の育成に精力的にかかわった。本学学生及び大学に関わる人々が利用できる自主語学学習施設「言語開発センター（LDC: Language Development Center）」（文京キャンパス図書館2階）の運営や日本人学生と留学生が主体となった交流イベントを企画・運営する「グローバルハブ（Global Hub）」といった語学学習支援および異文化交流を促進する事業にも取り組んできた。

語学センターは、大学のミッションである知の創造にも貢献できるように学内外でも尽力してきた。地域社会に求められる大学の役割の重要性が増すなか、語学センターもその責務の一端を担っている。“Think Globally, Act Locally”（地球規模で考え、足元から行動しよう）に明示されるように、学内だけでなく地域に貢献できる活動が国際化推進を標榜する語学センターの柱となっている。

語学センター設立から8年が経ち、コロナ禍は従来のコミュニケーションに重点を置いた英語教育を制限し、オンラインを中心とした教育法への転換を余儀なくされている。この最中に語学センターが拠点を構える学生会館が「学生交流センター（Student Central）」に変更されるにあたり、語学センター（英語教育部）のこれまでの足跡をたどり、今後の展望を記す。

①英語教育

語学センターの共通教育における英語教育の目標は、設立当初から発展的に変化している。現在のコロナ禍において、オンライン（リアルタイム・オンデマンド）授業あるいは対面授業でも実現可能な理念を掲げ、各教員が状況に応じて柔軟に対応しながら英語教育を実

践している。効果的な英語教育を提供するための具体的な目標として、実社会でも通じる実践的なコミュニケーション能力の向上、基本的な英語プレゼンテーション能力の育成、そしてグローバルに活躍するために必要な素地の涵養を挙げることができる。

現在、語学センターの英語教育部の常勤講師（5名）は、学部の英語教員や非常勤講師と緊密な協力関係のもとで英語教育を展開している。例えば、医学部では学生のニーズに合わせて医療や医学に関するトピックを取り入れた英語教育を志向している。また、工学部や教育学部の全学共通の英語だけでなく、国際地域学部で行っている英語の授業も担当している。

語学センターは、通常の英語カリキュラムに加え、英語学習を支える動機付けにも注力してきた。世界を舞台に活躍するエンジニアや医療従事者をはじめとする各界のプロフェッショナルをゲストスピーカーとして招き、「世界で活躍できるグローバル人材育成セミナー」（PEPIS: Practical English for Professional Interaction Seminars）を長年に渡り開催してきた。今後も英語学習へのモチベーションを促すイベントを継続的に実施したい。

②研究

語学センターの教員は英語教育や第二言語習得に関連する研究にそれぞれ従事している。（詳細は各教員の研究者総覧参照）語学センター全体としての今後の研究課題としては、本学学生の英語力の統一的評価の実施と共通教育の英語のカリキュラムに各学部の専門的な要素を融合させた内容言語統合型学習・教育（CLIL: Content and Language Integrated Learning）の導入があり、今後の進展が待たれる。

③地域貢献

語学センター教員は社会的・地域的要請を受け、各教員が英語教育および専門知識を積極的に提供してきた。設立当初、福井県内の企業の社員向けの英語の講義や福井県内の小・中・高に配属されている外国人英語補助教員や日本人英語教員の研修を担当した。また、福井県内の自治体の企画において海外研修プログラムに参加する中高生向けのワークショップを担当し、各地域のグローバル化活動にも関わってきた。それに加え、福井県高校英語弁論大会での審査や福井県国際交

流会館におけるボランティア活動をはじめとして福井県の方々と交流する機会を築いてきた。今後も地域社会のニーズに応えるべく福井県のグローバル化に貢献していきたい。

II. 今年度(2021年)の語学センターの活動について

1. FDの企画・運営

語学センターは、本学の英語教育のスキル向上および意識喚起、常勤英語教員と非常勤講師の交流促進のため、FD (Faculty Development) を主催した。2021年5月にオンラインで開催されたFDでは、吉田研作氏(上智大学名誉教授)に上智大学で導入されているCLIL(②研究を参照)を用いた先進的な英語教育の実践についての講演があった。吉田氏から福井大学の英語教育の現状についてのコメントがあり、今後の本学の英語教育についての重要な示唆が与えられた。また、参加者は他大学の英語教育の実践例から有意義な刺激を受け、本学の英語教育について検討し議論する格好の機会となった。

2. 夏季集中講義の企画・運営

語学センターは、夏季休暇中の9月に二つの集中講義：工学部の建築・都市環境工学科教員と共同で企画した英語リーディングとプレゼンテーションのスキルを磨く集中講義と、全学の学生を対象としたTOEICの集中講義を開講した。

英語リーディングとプレゼンテーションのスキルを磨く集中講義では、「国際的に活躍する技術者になるための英語運用能力の強化セミナー」と題して、語学教員と工学部教員が連携して試験的にCLILを取り入れた講義を企画した。一週間の集中講義の中で、パブリックスピーキングに必要な英語プレゼンテーションのスキルである、ジェスチャー、アイコンタクト、声の抑揚などに注意を払いながら、実際に自分の研究内容を英語で口頭発表し、今後の学会発表等にもつながる有益な内容となった。さらに、リーディングスキルでは主にTimed Readingと呼ばれる速読を促す教材の使用後、工学部教員が選定した工学系の英文テキストや学術論文を購入し、学術論文を読むための実践的スキルを習得した。参加者(建築・都市環境学部4年、修士、博士)からこの集中講義に好意的なコメントが寄せられた。今後は工学部他学科の高学年向けにも同様の講義を開講し、その後他学部の学生向けにも展開していくことを考えている。(写真1参照)



写真1：英語リーディング・プレゼンテーションの集中講義の様子

TOEICの集中講義では、TOEICを受験したことがない学生も多く参加し、TOEICの出題傾向の理解の後に、実際の問題を解き、問題の難易度を理解する機会となった。参加者から「大変勉強になった」といった反響があった。今後は高得点をを目指す学生を対象としたTOEICの集中講義の開講を検討している。

III. 新・学生交流センター

これまで語学センターの拠点を構えた学生会館が改築され、2021年10月から「学生交流センター(Student Central)」としてオープンした。学生が集う場所となるよう名づけられた同センターは、本学学生の入学から就職までを支援することをコンセプトとし、本学のグローバル教育をより強化することを目指している。一階に国際課と留学関連情報が閲覧できるラウンジ、学生交流の場であるグローバルハブ(Global Hub)(写真2参照)、二階にはキャリアセンターと日本語教育のための講義室、三階には入試課、アドミッションセンターに加えて、語学センター(英語教育部と日本語教育部)の教員室から構成される。学生交流センターがオープンされた今、今後の本学の国際化とグローバル人材の育成に語学センターとしてより一層精力的に関わっていきたい。



写真2：学生交流センター、グローバルハブ

The New Language Center: An Overview of How the LC Underpins English Language Learning at the University of Fukui

D. Jones

1. Introduction

In 2021, a brand-new building was opened right in the center of the University of Fukui's Bunkyo Campus. Named UF Student Central (学生交流センター), it houses various important departments like the Admission Center, IAD (International Affairs Division), and LC (Language Center), and it has some impressive spaces and facilities for students. The central location of the LC on Bunkyo Campus symbolizes its central function in coordinating Language Education at the university, especially at the foundational level.

Thus, the LC's influence as a hub extends far beyond the four walls of the new building itself and into all four of the university's schools, including the School of Medical Sciences at Matsuoka Campus, and the local community and beyond. The LC's curricula are delivered by the LC's core faculty, faculty members from the four schools, and a dedicated team of part-time instructors, all supported by highly capable IAD staff. As such, the LC represents a university-wide collaboration, involving people from various countries.

Thus, "The New Language Center" does not simply refer to the new physical building but also to the ongoing renewal of the mission, vision, and practice of the LC (as the LC Director explains in the accompanying Forum article). It is a good opportunity to reflect on the ups and downs of the LC so far and to think about how it can best facilitate the learning of students and the development of their skills, especially to prepare them for their diverse chosen careers.

In this context, this article aims to provide a "bigger-picture" perspective on how the LC performs a key foundational function for undergraduate students to acquire higher-level, more career-specific English-language skills during their later years of university study. With some variation in curricula and the number of years of study, the LC provides English-language classes for students in the early years of their undergraduate study in all four schools. These classes are mandatory: students have to take them. After that, again depending on the particular school and major, students either can or must take more English-medium courses. This article will give an overview of the particular features of each school's specialized classes of English-medium education for their upper-graders, aiming to show how they build off and deepen the knowledge and skills from the earlier LC classes, and to identify some key characteristics of these successful language learners/users for current students to try to adopt to emulate them.

2. School of Engineering

With over 2,000 undergraduate students, this is the biggest school. The LC is responsible for teaching the compulsory classes English I-IV for first-year

students while all second-year students must study English online through the E-learning system, Gyuto-e (rather like TOEIC-style learning). Basically, after an English placement test, students take English I-IV with classmates of the same department and similar English level. Students have two 90-minute English classes per week for the whole first year. The focus of these classes is English Communication and Presentation skills (for PowerPoint and Posters).

A feature of the new Language Center curriculum in these classes has been the introduction of a greater element of ESP (English for Specific Purposes). This means students use English for reading and researching, and then communicating and presenting, about Engineering and Technical topics that relate to their major studies and interests.

This is designed to provide students with a better springboard for their further studies, whether or not they decide or have to take additional English classes in the upper grades of their university years. For third- and/or fourth-year students, almost all departments of the School of Engineering offer specialized English classes, such as English for Science and Technology and Technical English. In these classes, students hone their ESP skills for their own interests and academic and career needs, such as to be able to conduct research, make international conference presentations and academic publications in English, engage in international business, and study or work abroad.

3. School of Education

The LC also provides mandatory English I-IV classes for first-year students in this school. Again, after a placement test, the Education majors are grouped with classmates of similar English levels. They also then receive two 90-minute English classes a week for the whole of their first year. The focus is also on students developing their English Communication and Presentation skills, with those skills being of particular importance to most of them as future public-school teachers. Some of the instructors for these classes have experience as public-school teachers in Japan to share with students, and some instructors arrange for students to join collaborations with local schools, such as a program to provide tutoring and support for the increasing number of overseas-heritage students in Japan. Again, the goal is to make the students' English learning relevant to their interests and needs.

Both alongside and after those mandatory first-year LC English classes, an increasing number of Education students are deciding to take more, and more specialized, English-medium classes. This may be because Japan's Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology has recently made "Foreign Language" (usually English) a full subject in

the elementary-school curriculum. Because a majority of Education students aim to get an elementary-school teaching license, they are aware that they might well have to teach or at least use English in future.

To earn a separate English Teaching License (for junior-high and high school), Education students (about 20-25% of them in recent years) must pass a variety of specialized English-medium content classes in addition to their other Education classes, teaching practicums, and other specific requirements. These English-medium classes are in fields such as English Teaching Methodology, Second Language Acquisition, English Linguistics (Phonetics, Grammar, and History of the English Language), Academic Writing, English Communication, British and American Literature, Comparative Cultures and Intercultural Understanding. The courses focus on enabling students to develop the knowledge and skills necessary to become effective English teachers. Almost all of these classes are conducted in English, and students can join short- and long-term study-abroad and work-abroad (as teachers) programs. In their final year, most students research, write, and present their graduation theses in English in one of the above fields to develop, deepen, and display their knowledge and ability for when they become English teachers.

4. School of Global and Community Studies (GCS)

GCS has a similar system to the School of Education in that some students can choose a track (the Global Studies approach) that has many additional specialized English classes besides the mandatory first-year ones. A different point, though, is that those mandatory General-English classes (English I-IV) form part of the core curriculum in GCS (Reading, Writing, Speaking, and Listening) and are taught exclusively by GCS and LC faculty. Thus, the integration of LC classes and faculty is deepest in GCS. Several GCS faculty members started at the university as LC faculty, and several current LC faculty members are teaching not only English I-IV but also higher-level specialized English classes in GCS (including in the graduate school). Again, for English I-IV, in GCS, students are divided into classes based on placement tests.

At the end of their first year, students must decide whether their preference is to major in Global Studies or Community Studies (although it is still not necessarily binding at that stage). Each year, approximately 20 out of 60 students decide on the Global Studies approach. In the spring semester of their second year, all GCS students, regardless of major, are required to take Intercultural Communication (taught in English). All GCS students, Global Studies majors as well as Community Studies majors, are expected to have a good grounding and ability in English for their future “glocal” careers.

Meanwhile, the Global Studies majors are recommended to take a curriculum of specialized English-medium classes, with an emphasis on cultivating academic skills (Academic Reading, Academic Writing, Research Methods, and Research Writing) and practically applying them in specialized content classes and PBL (Project-Based Learning) courses. These specialized content classes in English include English-Language Literature, Introduction to American Dialects,

Phonetics and Phonology for EFL Learners, Introduction to Linguistics, Second language Acquisition, Game-Based Learning, Topics in Sociolinguistics, Social Justice Issues in Education, The Japanese Language: History and Translation, Foundations of Japanese Culture, and Issues in Contemporary Japan from an International Perspective. Again, these classes utilize and build on the skills developed during the first-year classes. A new addition to the curriculum is the course Introduction to U-PASS Tutoring, a collaborative effort between GCS and LC faculty members which prepares second-year and third-year students to work in the LC’s University Peer Academic Support Services as English-language support and Japanese-language support tutors. Two additional key pillars of the GCS curriculum are study abroad (Global Studies majors must study abroad at a partner university for a minimum of six months, and Community Studies majors are encouraged to do so) and PBL courses (in which students engage in active and independent learning and develop and demonstrate leadership skills through engagement with local businesses, educational institutions, community leaders and the local government). A number of Global Studies majors also research, write, and present their senior thesis in English and aim to go on to careers in which they can utilize the English-language and other skills they have developed via the GCS curriculum.

5. School of Medical Sciences

Finally, on the School of Medical Sciences’ Matsuoka Campus, a similar situation to GCS exists in that the first-year General-English classes (English I-IV) are closely integrated as a building block in the curriculum for later English courses and are taught exclusively by LC faculty. In the College of Medicine, the English I-IV classes focus on cultivating communication and presentation skills, and then on reading medical-related articles and writing essays (the best of which are published every year as The Kuzuryu Memoirs).

Building on that, College of Medicine students must also take compulsory Medical English I-IV courses in their second and third years of study. These are taught by a College of Medicine professor and cover fields such as Basic Medicine and Anatomy, Patient Interviews, and Internal Medicine. In students’ fourth and fifth years, they have the option to take the Practical Medical English I and II classes, including studying the content and English used on the United States Medical Licensing Examination, which is extremely challenging. When medical students become doctors, they will need such high-level English skills to interact with foreign patients and their families, give international-conference presentations, conduct research and publish articles, and work with foreign medical professionals.

Meanwhile, College of Nursing students must also take English I-IV, which, in their case, has a focus on developing communication and presentation skills, and then on listening and speaking skills using Nursing English. In later years, students have the option to take more specialized elective classes in Nursing English. The goal is for students to develop the practical English communication skills that they need for their future nursing careers and professional development.

6. Conclusion

Clearly, that the Language Center performs a vital, integral function in all four schools of the university in helping students to develop their communication and presentation skills in English, which is a key goal in the mandatory first-year English I-IV classes across all schools. Beyond that, though, these classes are also tailored to the specific needs and purposes of each school's students, serving as a springboard for students to develop more specialized English knowledge and skills related to their chosen fields. This connection becomes evident when the later-year specialized English-medium classes in each school are elucidated.

A common and commendable feature of these later-year specialized English classes across the curricula of all four schools is that they engage students in increasingly academic content and discourse relevant to their major and future career. This may be characterized as a form of CLIL (Content and Language Integrated Learning), in which students can simultaneously learn both academic content and learn/develop English. Potentially, it is a "win-win" method. Accordingly, the LC has already started incorporating an increasing amount of CLIL into first-year English I-IV classes as an effective way of better preparing students for the CLIL that they may encounter in their later-year specialized English-medium courses in all four schools.

Finally, it is worth reflecting on and reminding ourselves what some of the common characteristics of successful language learners are. Motivation, especially intrinsic motivation, is very important: they take responsibility for their own independent, self-directed learning. Similarly, it is good to be creative and proactive in language learning: active learning is vital to language learning. Having "Willingness to Communicate" and "International Posture" (being open to, and interested in, diverse foreign cultures) are also key traits. Successful language learners

have curiosity. They notice and investigate points about the target language that are interesting and/or useful for them. They know that it is natural to make mistakes and do not mind making them, but also try to notice and correct their errors. They often set goals to achieve. They know that they can learn much by participating actively in classes, but also realize that, in itself, may not be enough. It is usually necessary to "go beyond" in learning: to take the initiative to think and do more, and to enjoy doing so. Learning should not stop when the bell chimes at the end of class. Language learning, like many other forms of learning and professional and personal development, is often a process of lifelong learning; it takes extra effort.

The University of Fukui has had many students who are excellent language learners in all four schools, and the university wants to have many more. The Language Center is performing a key function in this: not only in all of the classes highlighted in this article but also in the resources that the LC makes available for students to "go beyond" in their learning. In the Language Development Centers, state-of-the-art high-tech, multi-functional self-access centers for language learning, located in the libraries of both Bunkyo and Matsuoka Campuses, students can watch movies in English, find English reading materials, and study and practice for exams like TOEIC. In addition, the university offers various study-abroad opportunities for students in all schools: students can contact the IAD in the new building to find out more. Finally, the new Student Central building also features the Global Hub, a comfortable space for Japanese and international students to gather for intercultural exchanges and English study, including fun events organized by Student Coordinators. In all of these ways, the new Language Center can help facilitate students' development as successful English language learners and users. FukuDai students—please go for it! You can do it!

共通教育の 理念

共通教育は、学生に広く学問の知識や方法を修得させることによって、グローバル化した社会や知識基盤社会に対応できる総合的な判断力と行動力を有し、地域社会の発展に貢献できる人間性豊かな社会人となるための「教養」を身につけさせるとともに、円滑なコミュニケーションの基盤となる高い語学力及び専門科目の履修に必要な知識等を修得させることを目標とする。

編集後記

福井大学学生交流センターは、大学入学から就職までをシームレスに支援する就学支援拠点として、学生会館や留学生センターなどの福井大学・文京キャンパス内の施設を集約し建設されました。3階建ての建物には、留学生などが気軽に利用できる国際交流スペースや留学を希望する学生向けの相談施設、学生の就職支援窓口としてのキャリア支援課等が設けられています。寄稿頂いた先生方からは、それぞれの視点から学生

交流センターの役割や特徴をお示し頂きました。学生らが学生交流センターへ足を運ぶことで、彼らの目標達成や課題解決に効果的・効率的につながり、さらなるスキルアップや夢の実現に繋がって欲しいという思いを強く感じました。今後当センターが積極的に活用され、福井大学におけるグローバル人材の育成が益々推進されることを祈念致します。

(編集委員：伊達正起、西沢徹、Dylan Jones、岸俊行、山田孝禎)

福井大学共通教育フォーラム

●発行日 2022年2月 ●発行者 福井大学共通教育部

●連絡先 学務部教務課 学務総務・共通教育担当 Tel 0776-27-8627 Fax 0776-27-8519 E-mail:kyoumu-soumu@ml.u-fukui.ac.jp